

聖光房弁阿『念仏往生修行門』翻字科註稿

付劄記三箇条

森 新之介

緒言

鎌倉時代成立の『念仏往生修行門』一卷（以下、『修行門』と略す）は、浄土宗を立てた法然房源空の遺弟にして鎮西流祖の聖光房弁阿（弁長、応保二年「1162」〔嘉禄四年「1238」〕が撰述したものとされる。舜昌『法然上人行状絵図』巻第四十六（正和二年「1313」〔正中元年「24」〕成立）に佚文があるのみで亡佚したと久しく考えられてきたが、恋田知子が陽明文庫から元和七年（1662）書写本を発見し平成廿三年（2011）に翻刻紹介した¹⁾。

郡島昭示は二年後の廿五年、恋田の翻刻によつて『修行門』に論及し²⁾、三年後の廿八年、浄土宗大辞典編纂実行委員会編『新纂浄土宗大辞典』（浄土宗の項目「念仏往生修行門」を担当した。また善裕昭は二年後の卅年、『修行門』について「弁長作とみて問題はない」、「長年、流伝を絶つていた著書が発見されたのは幸いである」、「今後の研究に期待したい³⁾」と評した。

しかし、『修行門』は恋田による翻刻紹介後も研究で殆ど用いられておらず、それには少なくとも三つの原因があると考えられる。第一に、同書は凡そ十二丁余りできさほど長くないものの、全体の九割以上が平仮名で草書された和文であり、読解することが難しく煩わしい。第二に、陽明文庫本は訪問閲覧も複写請求も容易と言いつても、恋田の翻刻は容易に利用できて完璧に近いものの僅かに誤刻もある。そして第三に、陽明文庫本には誤写があり、恋田の翻刻でも校註されていない。

これらの問題を解消するため、本稿では陽明文庫本を科段し、仮名の多くを漢字に改め、誤写らしき箇所などを註記する。現代語訳せずに翻字するのは、

それだけで読者は文意を概ね理解できるだろうからである。稿者の短慮浅識では解し得なかった箇所が少なくなく、また誤読曲解した箇所もあるうが、已むに勝るものと信じて本稿を試作した。

- (1) 恋田知子「陽明文庫蔵『道書類』の紹介（上）——弁長作『念仏往生修行門』翻刻・略解題——」、『三田国文』五四、2011。
- (2) 郡島昭示「聖光の当時の仏教に対する主張——『浄土宗名目問答』『念仏三心要集』『念仏往生修行門』をめぐって——」、「『仏教論叢』五七、2013。なお、郡島は「聖光在世時における九州北部の仏教思想について——歴史史料を中心に——」（『仏教論叢』五八、2014）や「聖光の著作活動の目的について」（藤本浄彦先生古稀記念論文集刊行会編『法然仏教の諸相』、法蔵館、2014）でも『修行門』に論及している。
- (3) 善裕昭「法然上人行状絵図」に引用された『念仏往生修行門』について、「浄土宗学研究」四五、2018、一二二、一一四頁。

凡例

一、正文は公益財団法人陽明文庫蔵元和七年書写本（統一書名「道書類」、函号「近ト七二二」）のマイクロフィルム紙焼きを底本とした。同本の恋田知子翻刻は「恋版」と称し、僅かにある誤刻らしき箇所などを註記した。舜昌『法然上人行状絵図』は「昌伝」と称し、浄土宗出版編『国宝法然上人行状絵図』（『法然上人絵伝集成』四、総本山知恩院・浄土宗、2014）を用いた。

一、底本の本文に改行はなく、科段はすべて稿者による。第八丁表第一行乃至同丁裏第十一行は重写（稿末「劄記三箇条」参照）であり、前後と区別するため私に二格低書した。

一、仮名の多くは漢字に改めたり、濁点を加えたりした。また、私に句読点を施した。草書の判読には、児玉幸多編『くずし字用例辞典』普及版（東京堂出版、1993）と笠間影印叢刊行会編『字典かな——出典明記——』改訂版（笠間書院、1972）を参照した。

一、一部の漢字（「事」「又」「也」など）は仮名に改め、一部の漢字は適宜同音の別字に改めた（「物」「せん道」を「者」「善導」とするなど）。漢字の疊字は「々」に改めた。

一、ルビは原則として、滞らずに読むことの難しい漢字（「纒」など）と複数の訓みが有り得る漢字（「文」など）にのみ振った。その振ったルビはすべて底本の表記のままであり、必ずしも通常標準のものでない。

一、適宜送り仮名などを補った（「我身」「申侍なり」を「我が身」「申し侍るなり」とするなど）。

一、底本の誤写らしき箇所は原則として改めず、右傍に波線を施して註記した。文意不明の箇所にも波線を施して註記した。

一、書名は二重鉤括弧で、引用文などは一重鉤括弧でそれぞれ括った。

翻字科註

『念仏往生修行門』作者弁阿

それ念仏申して浄土に往生せんと志あらん人は、この次第をよく／＼心得て念仏を申すべきなり。しやうと^①を出づることは極めたる大事なり。往生極樂によりてぞ、この世の人のために易きことも侍るべき。往生極樂は、念仏によつてぞ、今のまんせ^②の罪深き輩^{ともから}の身に堪えたる行なる。

(1) 「しやうと」、底本「しやうと（字母「止」）」に作る。案ずるに、「と」はし字（字母「之」）の誤にして生死なり。

(2) 「まんせ」、底本「まん（字母「无」）せ」に作る。案ずるに、「ん」はつ字（字母「川」）の誤にして末世なり。

その故は、釈迦如来出で難くして出でさせ給ふて御法^{みのり}を説き給ふに、この娑婆世界の無戒無慚の浮かみ難きを、せめても浮かべんために説き給へる御法^{みのり}の

中に、浄土門の教法^③不可思議なるといへる浄土の三部経の中に、「念仏申して往生すべし」といへることを明かし給へり。この御法^{みのり}を憑みて、浄土門に入りて念

(二オ)

仏を深く信すべきなり。仏と申し奉るも憐れみ深くおはします。慈悲の主の教へをき給へる念仏の法門なり。

(1) 「出で」、底本「出」に作り、恋版「□」に作る。

(2) 「浮かべん」、底本「う（字母「宇」）かへん」に作り、恋版「そかへん」に作る。

(3) 「教法」、底本「け（字母「遣」）うほう」に作り、恋版「きうほう」に作る。

しかるを、大唐漢土にせん^①と和尚と申し奉りし大師、末世のなり降れる時、罪は早増しに積り世中はたゞ降り^②に降りて、善には日々に退き悪には夜々に進みて、十悪五逆を造りて無間地獄に沈み、三惡道の巢守主^{すもりあし}にならんとする衆生を憐れみて、末法の初めに世に出でさせ給いて、何事を勤行すとも、たゞ我が教へを深く信じて念仏の一行ばかりを勤めとして、毎日の所作にはあるいは一万、二万、三万、四万、五万、六万、七万、八万、九万、十万遍など申して、朝夕思ひを極樂に懸け心を報地^③に澄まして、憑みを弥陀に浅からず、念仏

(二ウ)

を始めて後より命終はるまで、怠ることなくよく／＼勤む人は、必ず往生疑いなき人なり。深く善導を憑み奉り、その教へを信すべきなり。

(1) 「せん」と、底本「せん（字母「止」）」に作る。案ずるに、「と」は誤にして善導を謂ふなり。

(2) 「ばかり」、底本「は（字母「者」）かり（字母「利」）」に作り、恋版「えかう」に作る。

(3) 「報地」、底本「ほ（字母「本」）う（字母「宇」）ち」に作り、恋版「かたち」に作る。

如何^{いか}信ずるとならば、我が朝秋津洲比叡山宝幢院黒谷法然上人の御教へに曰く、^①「源空らうせう^②なりし時、美作国菩提寺得業御房^③に従い奉りて、その後黒谷上人を師と憑み奉りて、種々の法門を習ひて、此度生死^{此たび}出でざらむことを歎

き申せしかども、我が身に堪へて勤むべき行なかりしかば、歎き悲しみて「この身を如何せん」と思ひ埋もれて、「年比の師匠は生死出づべきことも教へ給はず。しかれば、世の中に生死出づることをおしたる人がある」とて、藁沓縛り履きてふりおひ肩

(二一〇)

に懸け、東西に奔り巡り、南京北京に「智慧極め給へり」と聞こえし人々に、「如何にしてこの度しやうとを離るべき」と尋ね奉りしかども、「これこそ生死離るべき行よ」とげにしく教ゆる人なかりしかば、「如何にせん」と悲しみて、「身を徒になし、この世を空しく過ぐしては憂へあるべきことかな」と悲しみの涙を垂れて、「過去遠々のその上よりかくの如く空しく過ぐしてけり。またこの世を空しく送りなば、大ちひむしゆこふも遙かなるべきことかな」と悲しみて、三世に煩い一身に苦しまんことを思ひ巡らすに涙も止まらず覺えて、「さりとて已むべきことならず」とて、黒谷の報恩蔵と申す一切経蔵に入り籠りて一切経を披きて、「我が身に行いてこの度生死を出づべき法やまします」と

(二一ウ)

見侍りしほどに、唐土に善導和尚と申し奉るれば、長安城洛陽の都、かうそんわうていより始め奉りて、草木の風に靡くが如く念仏を勧め奉りて、浄土の法門を造りおき給へる御書のありけるを見出して、「我らはこれ十悪五逆の悪人なり。かゝる悪業深重の者のために善導和尚の御教へに「念仏申して往生すべし」とあることこそ、濁世の我らが身に堪へたる勤めにてあるべかりけれ」と見定め及びて侍り」と宣へり。

(1) 「曰く」、底本「い」(字母「以」)に作り、恋版「心わく」に作る。

(2) 「らうせう」、底本「ら」(字母「良」)うせう」に作る。案ずるに、「ら」はえ字(字母「衣」)の誤にして幼少なり。

(3) 「寺」、底本此くの如く、恋版「た」に作る。

(4) 「おしたる」、底本「おした」(字母「多」)る」に作る。案ずるに、「た」はふ字(字母「布」)の誤にして教ふるなり。

(5) 「ふりおひ」、底本「ふり」(字母「利」)おひ」に作る。案ずるに、「り」はみ字(字母「美」)の誤にして文笈か。然れども易林版『節用集』卷下云く、「文笈」は訓じてフバコと為すと。考ふべし。

(6) 「しやうと」、底本「しやうと」(字母「登」)に作る。案ずるに、「と」はし字(字母「志」)の誤にして生死なり。

(7) 「おしゆる」、底本「おし」(字母「之」)ゆ」(字母「由」)る」に作り、恋版「おもゆる」に作る。案ずるに、古語は教ふるにして教ゆるは後の訛語か。考ふべし。

(8) 「大ちひむしゆこふ」、底本「大ちひむ」(字母「武」)しゆ」(字母「遊」)こふ」に作る。案ずるに、誤ありて大地微塵劫を謂ふか。

(9) 「一切経蔵に」、底本「一」さ」(字母「左」)いきやうさうに」(字母「耳」)に作り、恋版「へきいきやうさうも」に作る。

(10) 「かうそんわうてい」、底本「かうそん」(字母「无」)わ」(字母「王」)うてい」に作り、恋版「かうそくまうてい」に作る。案ずるに、「ん」はく字(字母「久」)の誤にして高宗皇帝なり。

(11) 「そ」、底本此くの如く(字母「楚」)、恋版「せ」に作る。

しかれば、「これをこの世の人は深く信じて、必ず一向専修本願往生の念仏を申すべし。疑いなきことなり」と弘めさせ給ふ由を聞き及びて、この小僧弁阿はその上、天台の教へを習ひ論義門に

(三二〇)

片取りて仏法を営み明かし暮らし侍りしほどに、親しき同法のときうとかや申す病を六日より十一日まで患ひて、申の時ばかりに絶え入りして、火燈すまでも出ずざりしを見侍りしに、涙も止まらざりしかば、年比習ひたりし論義の文ども取り置きて、「偏に極楽を志して種々の勤めして、一期の終わりに必ず浄土へ渡らん」と志深く侍りし間、山上にて学問せしその上、後の世を営み給ふ上人の御中に、比叡山宝幢院黒谷の上人法然の御房と申す人こそ、智慧朗らかにして後世の道をは数数多人にも問ひ聞、自らも一切経蔵に入り籠りて一切経を見極め給ふこと数多度あるなれ。

(1) 「由を」、底本「よしを」に作り、恋版「よしかを」に作る。

(2) 「聞き及びて」、底本虫損ありて読み難く、「き、およ」(字母「与」)ひて」に作るか。恋版「きもおもひて」に作る。

(3) 「ときう」、底本此くの如く(字母「止」)起」(字母「と」)の右傍に「そ」(字母「曾」)を小書す。案ずるに、病名なり。未だ考へず。

(4) 「六日より十一日まで」、底本此くの如きか。虫損ありて読み難し。恋版「□るより□るまで」に作る。案ずるに、意通ぜざるが如し。考ふべし。

(5) 「絶え入り」、底本「た」(字母「多」)え」(字母「衣」)いり」に作り、恋版「えいり」に作る。

(6) 「出すざりし」、底本「出す」(字母「春」)ざりし」に作る。案ずるに、当に出さゝりに作るべし。

(7) 「数」、底本此くの如く、恋版「教」に作る。

その経の中にとりて、浄土の三部経の中に『阿弥陀経』を我が経とし、論

(三ウ)

の中に天親菩薩の造り給へる『浄土論』を我が論とし、大唐の大師の中には善導和尚を我が師とし奉りて、恭敬渴仰して浄土の勤めも一筋に、一向専修の阿弥陀仏こそ目出度き有り難き往生極楽の行とはなり侍るなれとて、「縁を結び奉らん」と思ひし間、京師系参らせ侍るべきをころに、その聞こえ広くなり給へるにうたう上人南無阿弥陀仏と申して忝く聞、給ひし聖、法然上人を請じ奉りて大仏殿の半作軒下を堂舎と設いて、十六想観の堂の前、浄土の三部経善導和尚の御影あはせて三箇朝の説法を念仏をもつて釈し給ひしに、奈良の都興福寺、東大寺の智者ども頭打ち包み

(四オ)

て大衆に立ちけるが、各々聴聞して涙を流し哀れみ貴み奉りて、あるひは随喜の極まりなく、「この導師は我が朝日本国の人とは覚え、高麗新羅大唐の聖人か、あるひは大権の菩薩の化身か」と怪しみ貴み弔るほどこそあれ。

(1) 「我」、底本「を」(字母「遠」)わ(字母「和」)に作り、恋版「と申」に作る。

(2) 「中」、底本此くの如く、恋版「事」に作る。

(3) 「縁」、底本「系」(字母「恵」)んに作り、恋版「あん」に作る。

(4) 「を」(字母「正」)の誤にしてところにか、「ろ」はと字(字母「止」)の誤にしてを殊にか。考ふべし。恋版「を」(字母「と」)に作る。

(5) 「にうたう」、底本「にう」(字母「宇」)たうに作る。案ずるに、「う」はつ字(字母「川」)の誤にして入唐なり。

(6) 「軒下」、底本「の」(字母「乃」)き(字母「木」)下に作り、恋版「の木下」に作る。

(7) 「十六想観の堂」、底本「十六さ」(字母「佐」)う(字母「宇」)く(字母「久」)わ(字母「王」)ん(字母「无」)の(字母「能」)た(字母「多」)う(字母「宇」)に作る。案ずるに、十六観堂を謂ふか。未だ考へず。

(8) 「三箇朝」、底本「三かてう」に作る。案ずるに、未だ安んぜず。

(9) 「説法」、底本「せつ」(字母「川」)ほうに作り、恋版「せんほう」に作る。

(10) 「給」、底本「た」(字母「多」)ま(字母「末」)に作り、恋版「をか」に作る。

(11) 「興福寺」、底本「こう」(字母「宇」)ふ(字母「不」)くしに作り、恋版「こくら

くし」に作る。

(12) 「打ち」、底本「う」(字母「宇」)ち(字母「知」)に作り、恋版「そい」に作る。

(13) 「大衆に立ちける」、底本虫損ありて読み難く、「大しゆにたちけ」(字母「遣」)るに作るか。恋版「大しゆにたちなる」に作る。案ずるに、大衆に立ち交じりけるの意か。

(14) 「高麗」、底本「か」(字母「可」)うらいに作り、恋版「さうらい」に作る。

奈良の京おしなべて平の京さまに智慧ある人の物を聞くをよくるちやう、僧俗を言わず由々しく貴み奉りしほどに、北山のかた大原と申す所は、都といひ実に後世を思ふ人々籠居し給へるところなり。かの所に天台座主中納言法印顕真の御房とて「仏か」と申す人のおはせしが、東大寺の上人を喚び奉りて使用として法然上人を請じ奉りて、念仏法門をよく談じて「貴く目出度く侍ることなり」とて、

(四ウ)

「今より已後、一向に念仏に歸し奉らん」とて、親しき宗の行を捨て、たゞ一筋に念仏を申させ給いき。「これより後は、ゆめ／＼疑ふ人あるべからず。我が朝にはさすが顕真」と源空上人と歎じ給いて、まんせさせんがために弘め給へる念仏の法門なるを、何れの人か難意を致し、疑いを成すべきや。もし毀謗の輩あらば、深く思ふべし。「一には愚痴の至り、二には外道の所為なり」とて、行道念仏し給ふべき。これこそ我が朝の一向専修の念仏の初めなりけれ。

(1) 「よくるちやう」、底本此くの如きか(字母「与」)久「留」知「也」(字母「宇」)。案ずるに、未だ考へず。

(2) 「まんせ」、底本此くの如し(字母「末」)无「世」。案ずるに、未だ考へず。

(3) 「難意」、底本「な」(字母「奈」)んいに作る。案ずるに、未だ安んぜず。恋版「ほんい」に作る。

この由を聞、及びて、法然上人お請じ奉りて、嵯峨の御堂や大秦、にむわい寺、清水などにて、一向専修の念仏法門を説かせまいらせ、「これほど貴きも何事といふとも侍らじ」と弔りあへるほどに、九条殿、

(五オ)

花山の院殿、徳大寺殿、かゝるやごとく智慧賢くおはします殿、念仏門に入らせ給ふ間、「我も／＼劣らじ負けじ」と貴賤念仏に入らせ給ふ由、この小僧弁阿は聞、伝へて、上人の吉水と「如何に」と午の時ばかりに問ひ奉りて、

「たゞ暫し」と思ひしほどに未の時ばかりまで、上人も答へ自らも向い奉りて承り、思ふに涙も止まらず哀れに貴く覚え侍りしかば、その次の日より上人に従い奉りて、白川の辺に草庵を結びて、朝夕上人の御庵室を栖として習ひ伝へ侍る、一向専修の念仏なる。

- (1) 「嵯峨の御堂」、底本「さかのみたう」に作る。案するに、清凉寺を謂ふか。
- (2) 「にむわい寺」、底本「に(字母「爾」)む(字母「武」)わ(字母「王」)い(字母「い」)寺」に作り、恋版「にむわいち」に作る。案するに、誤ありて仁和寺を謂ふか。
- (3) 「一向」、底本「一か(字母「可」)う(字母「宇」)」に作り、恋版「こそ」に作る。
- (4) 「と」、底本此くの如し(字母「登」)。案するに、に字の誤か。
- (5) 「る」、底本此くの如し(字母「留」)。案するに、り字(字母「利」)の誤か。

しかるにこの世の中の念仏者、小上人の御趣とは申し合いて侍れども、上人の御義にはつや／＼あら

ざりしことも数多申し乱れ侍ることこそ、不便の次第に侍れ。

故上人弁阿に教へ給ふは、善導の心は、浄土へ参らんと思はん人は、必ず三心を具して念仏を申すべきなり。三心とは一には至誠心、二には深心、三には回向発願心なり。

一に至誠心といふ、「實しく往生せん」と思ひ取りて念仏を至誠心とは申し侍るなり。させる別のやうなどある。別のくけくの入るにもあらず、智慧才学の故にもなし。たゞ偽り飾りて人目ばかりの申しやう、雑毒虚仮の念仏と申すなり。心中に「必ず往生せん」と思ひて申すは、至誠心具したるべし。

二に深心といふは、露ばかりも念仏疑ふ心なく「決して往生せんずる」さやうに思ひ取りて、また「我が身はこれ無極の罪惡生死の凡夫

(六オ)

なり。決定として地獄に墮すべきことを、日夜とうな行住坐臥になんせる身なり。如何なる善根を励むとも、更に疑ふべきやうもなき身なり」と思ひ知るべし。しかるに、「弥陀覺王大せん悲願の忝きによつて、この念仏を勤めいたらば、自然に後の惡業煩惱一々に消滅して必ず聖衆の蓮台に坐せんこと、極まりなき喜びかな」と深く思ひ取りて、「この念仏より他に、我が身の容易く助かるべきことはつや／＼なし」と堅く信ずるをもつて深心と申すなり。別のようなきなり。

三、回向発願心といふは、「正しく往生せん」と志し申す念仏を申すなり。また別のやうなく、これはこれたゞ一筋に「極樂に我が身の参らんとためなり」と思ひ

(六ウ)

たる、これを回向発願心といふなり。

詮ずるところ、この世を厭ふをもつて至誠心といひ、念仏を「貴きことなり」と信ずるをもて深心といひて、極樂を願ふをもつて回向発願心といふなり。穢土を厭わずして浄土を求めば、纜を解かずして船を漕ぐが如し。念仏を信ぜずして往生を期するは、暗き道に燈を消したるが如しといへり。これ各々知るを、善導和尚の三心とは申すなり。これを法然上人より習い伝へ奉りたる三心の子細に侍る。この他、また別のやうなきなり。これ／＼もこの旨を心得て申させ給ふべし。

- (1) 「小」、底本此くの如く、恋版「こ」に作り、昌伝「故」に作る。案するに、「故」是なり。
- (2) 「御趣」、底本「御し(字母「之」)ゆ(字母「由」)」に作り、昌伝「御流」に作る。
- (3) 「くけく」、底本「く(字母「久」)け(字母「介」)く(字母「久」)」に作るか。案するに、未だ考へず。恋版「くそく」に作る。
- (4) 「□」、底本虫損ありて読み難く、恋版もまた「□」に作る。案するに、を字(字母「遠」)か。
- (5) 「決して」、底本「けつとして」に作る。案するに、「ちやう」を脱せり。
- (6) 「に」、底本此くの如く(字母「二」)、恋版「と」に作る。
- (7) 「日夜」、底本「日や」に作り、恋版「ひや」に作る。
- (8) 「とうな」、底本「と(字母「止」)う(字母「宇」)な(字母「奈」)」に作るか。案するに、未だ考へず。
- (9) 「行住坐臥」、底本「きやうち(字母「知」)うき(字母「左」)くわ」に作り、恋版「きやうこうとくわ」に作る。
- (10) 「う」、底本此くの如く(字母「宇」)、恋版之れを脱せり。
- (11) 「大せん」、底本此くの如し(字母「世」)「无」。案するに、未だ考へず。
- (12) 「厭ふ」、底本「いと(字母「止」)ふ」に作り、恋版「いふ」に作る。
- (13) 「か」、底本一字を消して右傍に小書すること此くの如く(字母「可」)、恋版「ら」に作る。
- (14) 「期する」、底本「こす(字母「春」)る」に作り、恋版「こふる」に作る。
- (15) 「を」、底本此くの如く(字母「遠」)、昌伝「そ」に作る。案するに、「そ」是なり。
- (16) 「こ」、底本此くの如く(字母「己」)、恋版「く」に作る。案するに、く字(字母「久」)の誤なり。

たゞし、念仏の数は『観念法門』と申す文に勧めて曰く、「専ら弥陀の名号を念ずること一万、二万、三万、四万、五万、六万、七万、八万、九万、十万遍なり。人の根性に随いて、この中に何れにも申すべきなり」。

(七才)

たゞし、小上人仰せられしは、「男女在家にして切らで世間に障へられてその暇なからん人は、一万遍などを申すべし。また在家なりともその暇打ちありて志深々らん人は、三、四、五万遍など申すべきなり。また僧や尼などの様をたらんしるしには少なからん、ちやう三万乃至五万、六万遍を申すべし。この他、多く申さんと思わん人は、七、八万もしくは九、十万、如何にもく多く申すに過ぎたる法門はあるべからず」。

(1) 「小」、底本此くの如く、恋版「こ」に作り、昌伝「故」に作る。案ずるに、「故」是なり。後の重写も亦「故」に作る。

(2) 「切らで」、底本「きら(字母「良」)て」に作り、恋版「きゝて」に作る。案ずるに、「思ひ」を脱せり。後の重写「思ひきらて」に作る。

(3) 「障へられて」、底本「さ(字母「散」)へられて」に作り、恋版「かへられて」に作る。

(4) 「たらん」、底本此くの如し。案ずるに、「かへ」を脱せり。後の重写「かへたらん」に作る。

(5) 「ちやう」、底本「ち(字母「知」)やう」に作る。案ずるに、「ち」はり字(字母「利」)の誤にして両なり。

たゞし、「乃至十念」といひ、もしくは「三念五念仏来迎」とも明かし、「一念成就即得往生」とも述べたるは、一生造悪の輩の念仏といふこととうち物にして誤てこれを聞けば、料叶はず物悪しくうちかみと、

(七才)

(1) 「成就」、底本「しやうしゆ(字母「遊」)に作り、恋版「しやうしを」に作る。

(2) 「と」、底本此くの如し(字母「止」)。案ずるに、「と」はを字(字母「遠」)の誤なり。

(3) 「うち物」、底本「う(字母「宇」)ち(字母「知」)物」に作る。案ずるに、未だ考へず。

(4) 「うちかみと」、底本此くの如し(字母「宇」「知」「可」「三」「登」)。案ずるに、未

だ考へず。

(重写)

誠心といひ、念仏を「貴きことなり」と信ずるをもつて深心といひ、極樂を願ふをもつて回向発願心といふなり。穢土を厭はずして浄土を求めば、纜を解かずして船を漕ぐが如し。念仏をしせすして往生をするは、暗き道に燈を消したるが如しといへり。これ各々知るを、善導和尚の三心とは申すなり。これを法然上人より習ひ伝へ奉りたる三心の子細に侍る。この他、また別のやうなきなり。これくもこの旨を心得て申させ給ふべし。

たゞし、念仏の数は『観念法門』と申す文に勧めて曰く、「専ら弥陀の名号を念ずること一万、二万、三万、四万、五万、六万、七万、八万、九万、十万遍なり。人の根性に随いて、このうちに何れにも申すべきなり」。

(八才)

たゞし、故上人仰せられしは、「男女在家にして思ひ切らでその暇なからん人は、一万遍などを申すべし。また在家なりともその暇打ちありて、志深々らん人は三、四、五万遍など申すべきなり。また僧や尼などの様を変へたらんしるしには少なからん、ちやう三万乃至五、六万遍を申すべし。この他、多く申さんと思わん人は、七、八万もしくは九、十万、如何にもく多く申すに過ぎたる法門はあるべからず」。

たゞし、「乃至十念」といひ、もしくは「三念五念仏来迎」とも明かし、「一念成就即得往生」とも述べたるは、一生造悪の輩の念仏といふこととうち物にして誤てこれを聞けば、料叶はず物悪しくうちかみと、

(1) 「しせすして」、底本此くの如し。案ずるに、ん字を脱せり。前の同文「しんせすして」に作る。

(2) 「する」、底本此くの如し。案ずるに、こ字を脱せり。前の同文「こする」に作る。

(3) 「こ」、底本此くの如く(字母「己」)、恋版「く」に作る。案ずるに、く字(字母「久」)の誤なり。

(4) 「切らで」、底本「きらて(字母「帝」)に作り、恋版「きらふ」に作る。

(5) 「ちやう」、底本「ち(字母「知」)やう」に作る。案ずるに、「ち」はり字(字母「利」)の誤にして両なり。

- (6) 「成就」、底本「しやうしめ(字母「遊」)に作り、恋版「しやうしを」に作る。
- (7) 「と」、底本此くの如し(字母「止」)。案ずるに、「と」はを字(字母「遠」)の誤なり。
- (8) 「うち物」、底本「う(字母「宇」)ち(字母「知」)物」に作る。案ずるに、未だ考へず。
- (9) 「うちかみと」、底本此くの如し(字母「宇」「知」「可」「三」「止」)。案ずるに、未だ考へず。

かん⁽¹⁾なといふ人の最期臨終の時、善知識の勧めによてかくの如く倣ひて、その後やがて悪を造らで終わるに至^{いた}てのことなり。「ねんな⁽²⁾」と名付けて一度「南無阿弥陀仏」と申して、その後もしは十念、廿念が間、しん万劫四悪殺生偷盜を事^し、⁽³⁾「我はこの一念を称へたりしかば往生せんずるぞ」と言ひたらんこと、誰かは信ずべき。従^{したが}ふて僧や尼を勧め給ふ定、⁽⁴⁾「三万遍申せ」と上人宣^{のたま}いしなり。しからば、善導の釈に曰く、「あるいは三万、六万を得しは、皆これ上品上生の人なり」と。しかれば、すなはち同じくは上品上生を志して申すべきなり。かやうに記し申すばかりは、念仏の義を人に変へて言ひ乱す間、十人は十に偏して百人は百聞きて人を惑わすなり。たゞ偏に念仏を止めんための外道の所為なり。

- (1) 「かんな」、案ずるに、僧名なり。寂恵良曉『決疑鈔見聞』巻第三云く、出雲国観阿なるものあり、然阿良忠と同道西下すと。
- (2) 「ねんな」、案ずるに、僧名なり。然阿良忠か、念仏房念阿か。
- (3) 「一度」、底本「一た(字母「多」)ひ」に作り、恋版「てかひ」に作る。
- (4) 「しん」、底本「し(字母「志」)ん」に作る。案ずるに、「し」はせ字(字母「世」)の誤にして千なり。
- (5) 「誰」、底本「た(字母「多」)れ」に作り、恋版「これ」に作る。
- (6) 「従がふて」、底本「下か(字母「可」)ふ(字母「不」)て(字母「天」)」に作る。案ずるに、未だ安んぜず。
- (7) 「聞きて」、底本「き(字母「幾」)ゝて(字母「天」)」に作るか。案ずるに、未だ安んぜず。

たゞし、故上人は世に易くこそ念仏をはかみそんに教へ給いしか。さればこ

そ
国々より参りて念仏を受け奉りつる人々も心易く思ひ侍りしことなり。いわんや大原の松和尚御房ほどの止事なき智者も「実に目出度かりけることかな」⁽⁵⁾□⁽⁵⁾けをはせさせ給いしことなり。この旨を心得ん人々は世に易く思ふべきことなり。

- (1) 「故」、底本「こ(字母「古」)に作り、恋版「古」に作る。
- (2) 「はかみそん」、底本此くの如きか(字母「八」「可」「見」「曾」「无」)。案ずるに、意通ぜず。考ふべし。
- (3) 「松」、底本此くの如し。案ずるに、大原の智者は顯真法印を謂ふ。疑ふらくは、法印の印字を脱し、法字の異体法字を「松」に誤るか。考ふべし。
- (4) 「御房」、底本「御は(字母「者」)う」に作り、恋版「御をう」に作る。
- (5) 「□」、底本虫損ありて読み難く、恋版「き」に作る。案ずるに、た字(字母「多」)に似たれども意通ぜず。考ふべし。

「たゞ詮ずるところ、「この念仏は決定往生の行なり」と信を取りつれば、自然に三心は具して往生するな」と、やすくと法然上人は仰せられ侍りしなり。「かやうに思ひ取りて、たゞ念仏の数多く六、七万遍も申す人は、百人ながら往生すること疑いなし。善導も釈せさせ給へり」とて、法然上人は日別に勤めに七万遍を申し給いき。箱谷の尼御前は十万遍申させ給いしを、世の中の貴き人なり、有り難きことにせさせ給いしなり。⁽²⁾

- (1) 「な」、底本「な(字母「奈」)」に作り、昌伝「そ」に作る。案ずるに、「そ」是なり。
- (2) 然阿良忠『観念法門私記』巻上云く、箱谷禪尼十万遍を行じて弁阿これを歎すと。

「この (九ウ)

世の中の人の念仏には、たゞ一念⁽¹⁾などいひて人を徒になすこと、不便のこと⁽²⁾に侍れ。また「念仏を疑へばこそ罪をば造らざらめ」と言ひ悩まして、もとより⁽³⁾抄々しくもなき罪事をいよく悪業深きものに勧めなすことの浅まましき、三心をもやうく教へなして⁽⁴⁾解釈がましく智者の振る舞いすること、無下に飾れる心なり。「念仏の義を荒涼には言わじ」なんと言ひて心憎顔に事あり顔な

ること、無極の逆罪なり。これ体のこと⁽⁶⁾らを雑毒虚仮の人とは名付くるなり。また「目出度きことあり」とて、人には「隠れ隔つる」など言ひて、志ある人には誓文起請を書、せて許すなどいふ、さることやあるべき。

- (1) 「一念」、底本「一ねん」に作り、恋版「ねん」に作る。
- (2) 「も」、底本此くの如く(字母「裳」、恋版「は」に作る。
- (3) 「まま」、底本「ま(字母「末」ま(字母「満」)に作る。案ずるに、ま一字衍なり。恋版「ま」に作る。
- (4) 「無下に飾れる」、底本「むけに(字母「爾」)か(字母「可」)き(字母「左」)れる」に作り、恋版「むけまされる」に作る。
- (5) 「荒涼」、底本「くわ(字母「王」)う(字母「宇」)りやう」に作り、恋版「くきりやう」に作る。
- (6) 「ら」、底本此くの如く(字母「良」)、恋版「、よ」に作る。

善導多くの文^{ふみ}を造り給いて浄土宗となつて、「末世の如何ならん人も、往生

(一〇オ)

志あらん人はこれによりて生死を離れ、浄土へ参れ」とて弘め教へおき給へる。法然上人は南北二京の若干^{そご}の智者くらやきせんらくせう⁽³⁾にして、旬^{のし}り弘め給へる念仏往生の法門なり。「仏はこれらの人をお嫌い、何れの者をお嫌い給へる。たゞ十方衆生を悉皆念仏⁽⁴⁾を信じて極楽へ参れ」と仰せられたるに、誰かは十方より他の人まで嫌い隔てらるべきや。させる「人に隠す」などいふばかりは、真言と申す法門こそ「密教」など申すめれ。また論義の中にこそ「目出度き秘義」など申すばかりも侍れ。

- (1) 「なつて」、底本「なつて(字母「天」)に作る。案ずるに、「て」はけ字(字母「計」)の誤にして名づけか。
- (2) 「る」、底本此くの如し(字母「留」)。案ずるに、り字(字母「利」)の誤か。
- (3) 「くらやきせんらくせう」、底本此くの如く(字母「久」「良」「也」「幾」「世」「无」「良」「久」「世」「宇」)、恋版「くやきせんらくせう」に作る。案ずるに、意通ぜず考ふべし。
- (4) 「を悉皆」、底本「を(字母「遠」)しつかい(字母「以」)に作り、恋版「をしつかは」に作る。案ずるに、「を」字衍か。
- (5) 「十方」、底本此くの如きか。恋版「十万」に作る。
- (6) 「ら」、底本此くの如く(字母「良」)、恋版「た」に作る。

- (7) 「ばかり」、底本「斗」に作り、恋版「事」に作る。案ずるに、事の誤か。

実に今これ念仏と申すは、末代悪世のこのごろ、むにん無慚の男女、愚痴無智の尼や入道の、如何にしても生死を離るべきやうも見えぬ者を憐れみ給いて、大唐上人善導和尚念仏勧進の

(二〇ウ)

文^{ふみ}を造らせ給いて、これを勧め給ふ。我が朝法然上人は「今度生死を離れんことを如何せん」と歎き悲しみ給いて見出し給へる法門なるを、「我が如くに生死を出でよ」と、まんせの諸人はたゞ一筋に思ひ取りて、善導の御勧めの念仏を申すこそ、人を嫌はず教へ給へることなれ。

- (1) 「むにん」、底本此くの如し(字母「武」「爾」「无」)。案ずるに、無戒の誤か。
- (2) 「まんせ」、底本恋版「まん(字母「无」)せ」に作る。案ずるに、「ん」はつ字(字母「川」)の誤にして末世なり。

また、物の数ならねども、この小僧弁阿も「まんせ⁽¹⁾の尼入道、無戒無慚の男女、外道無極の輩なりとも、実しく思ひ取りて往生願わん人は、かくの如くの次第を心得て、故法然上人の御勧めを信じて、念仏の数を朗らかに申して、臨終正念往生極楽と志し給へ」と、はるぐと伝へをき侍らんに聊か記し申すところなり。所詮末世の人々よく信ずべし。

- (1) 「まんせ」、底本「まん(字母「无」)せ」に作る。案ずるに、「ん」はつ字(字母「川」)の誤にして末世なり。
- (2) 「と」、底本此くの如し(字母「止」)。案ずるに、を字(字母「遠」)の誤か。
- (3) 「聊か」、底本「い(字母「以」)き(字母「左」)か(字母「可」)に作り、恋版「いきを」に作る。

善導はそれ誰ぞや。すな

(二一オ)

わち西方極楽の教主阿弥陀仏、末世の凡夫の機に相応し給わんために、人と現じて仮に善導と申す名を付き給へる。一切の我等如きの一生造悪の輩^{とまがら}を、親の子を思ふ如く憐れみ給はんがために、このなんきんふたいに出で給いて、『観經の疏』並びに多くの念仏の勧進^{ふみ}の文とかを現在に抄するを得て造りをき給へ

り。

浄土宗を立て給ふに、大唐^{もつこし}唐土までは多くの人を利益し給いて仮に往生の由を示して、日本国に渡りては法然上人と現はれ給へる由、止事^{やんごと}なき智者たち数多^{あまた}賢く、人の逝去に夢の告げ、その数聞こえ給へり御ことなり。容易く誉めも謗りもし奉るべきに及ばぬことなり。偏に極楽の阿弥陀^{ぼとけ}仏^(一一ウ)おはしませることなれば、「あらたに極楽往生せん」と志あらん人は、深くかの伝へを正に持ちて信ずべきなり。

しかればすなはち、極楽にては阿弥陀、大唐にては善導、我が朝にては法然上人といはれ給へり。故に知りぬ、三生一心にして三業の念仏を勧め給へりといふことを。深く信じて、一筋に念仏怠る無かるべし。

- (1) 「る」、底本此くの如し(字母「留」)。案ずるに、り字(字母「利」)の誤か。
- (2) 「なんきんふたい」、底本「なんき(字母「幾」)んふたい」に作る。案ずるに、「き」はせ字(字母「世」)の誤にして南瞻浮提なり。
- (3) 「り」、底本此くの如し(字母「利」)。案ずるに、る字(字母「留」)の誤か。
- (4) 「あらたに」、底本此くの如きか(字母「安」「良」「太」「爾」)。案ずるに、意通ぜず。考ふべし。
- (5) 「故」、底本此くの如く、恋版「さら」に作る。
- (6) 「る」、底本此くの如し(字母「留」)。案ずるに、り字(字母「利」)の誤か。

もしこれ習わぬことをも「習ひたる」⁽¹⁾と言ひ、法然上人の仰せられぬことをも「仰せられたる」⁽²⁾と申して、僻めるやうにて人のために腹黒⁽³⁾をも申すものなれば、三世の諸仏、十方の菩薩、殊に憑み奉るところの釈迦、阿弥陀、観音、勢至、善導聖霊、念仏守護梵天、帝釈の御憐れみ無くして、現世後生叶はぬ身となり侍らん。まんせ無智の人を憐れみて「その時を惑はし奉らじ」^(二二オ)とて、かやう記しおくところなり。ゆめく疑いを成すことなくして、念仏の数多く三、四、五万遍など請けて臨終正念往生極楽と願ひ給はん人々は、疑いなき往生人にておはしますべきなり。これ弥陀の本願にも叶ひ、善導御憐れみにも相応し、法然上人の心にも叶ひ給ふべし。

- (1) 「る」、底本此くの如く(字母「留」)、昌伝「り」に作る。案ずるに、り是なり。

- (2) 「る」、底本此くの如し(字母「留」)、昌伝「り」に作る。案ずるに、り是なり。
- (3) 「腹黒」、底本「はら(字母「良」)くろ」に作り、恋版「はくろ」に作る。
- (4) 「守護」、底本「しゆこ」に作り、昌伝「守護の」に作る。
- (5) 「まんせ」、底本「まん(字母「无」)せ」に作る。案ずるに、「ん」はつ字(字母「川」)の誤にして末世なり。

- (6) 「惑はし」、底本「まとは(字母「八」)し」に作り、恋版「まといし」に作る。
- (7) 「請けて」、底本「う(字母「宇」)けて」に作り、恋版「かけて」に作る。
- (8) 「と」、底本此くの如し(字母「止」)。案ずるに、を字(字母「遠」)の誤なり。
- (9) 「相応し」、底本「さうおう(字母「宇」)し」に作り、恋版「さうおかし」に作る。

日本国の智者と申す大原の和尚⁽¹⁾、高野の僧都御房の如くの人々は皆六万遍なり。故法然上人の御房は初めは六万遍、後には七万遍なり。世間に訃^{のし}り給へる止事^{やんごと}なき人々は、皆数を取りて念仏申して臨終を祈り給ふなり。世に聞こえぬ者も「数取らと、臨終を祈らずとも」と立てつるは、愚痴の至り不道の起り、古も背き人にそぬきやうはらのことぞ、天魔の狂はし^(二二ウ)魔縁の所為なり。甚だ耳に聞ゝ入れず、よくく心を鎮めて案ずべし。往生ほどの大事に思ひ掛ゝるばかりの人の空しく眠^ねりいて、「我はこれ一念の者なれば、往生疑いなき身なり」と言ふこと、実然らぬばかりなり。

- (1) 「和尚」、底本「おしやうの」に作り、「の」を消すに両斜線を以てせり。恋版「おしやうの」に作る。
- (2) 「数取らと」、底本「数とら(字母「良」)と(字母「止」)」に作る。案ずるに、下の「と」はて字(字母「天」)の誤にして数取らでか。恋版「□とうと」に作る。
- (3) 「そぬきやうはら」、底本此くの如きか(字母「所」「奴」「幾」「也」「字」「者」「良」)。恋版「にぬきやうはら」に作る。案ずるに、意通ぜず。考ふべし。
- (4) 「一念」、底本「一ねん」に作り、恋版「ねん」に作る。
- (5) 「は」、底本此くの如く(字母「者」)、恋版「ん」に作る。
- (6) 「ばかり」、底本「斗」に作り、恋版「事」に作る。案ずるに、事の誤か。

元和七年九月十日これを写し候ふ。仮名遣いも悪^{わる}く候へども、本^{ほん}のまゝ書き申し候ふ。八十余りの筆にて候ふまゝ、皆々御覧じ候ふ人々御笑い候はんずれども、「もしは念仏一遍も御手向け候はんか」と、眼も翳み筆も叶ひ候はねども、書き置き申し候ふ。^(二三オ)

節記三箇条

一、『修行門』は改行などなしに八千数百字が連続しているが、当初から一連のものであったとは考えられない。例えば、善導について第一丁裏で「たい^唐うかん^漢とにせんとおしやうと申たてまつりし大し」と述べ、少し後の第三丁表でまた「もろこしにせん^唐たうおしやうと申たてまつる」と述べ、そして源空について第二丁表で「わかつてうあきつしまひゑさん^谷ほうとうゑんくろ^院たにほうねん上人」と述べ、少し後の第三丁裏でまた「ひゑさん^院ほうとうゑんくろ^院たにほうねん上人の御はうと申人」と述べるのは余りに不自然であり、内容も前後に重複がある。

また、第九丁表に「ねん^名となつて」云々という、弟子の「ねんな」に宛てて書かれた書状のような文章がある。この「ねんな」とは弁阿弟子の然阿良忠を指すかも知れない。

恐らく弁阿は弟子などに送った書状の草稿や案文を手許に残しており、没後に遺弟がそれらを複合して一書にしたものが『修行門』であろう。⁽¹⁾文中に接続詞「たゞし」が頻出して文脈が大きく転ずるのも、異なる書状を「たゞし」で繋に接続させたからだと考えられる。なお書名の『念仏往生修行門』とは、論義のための法門でなく修行して念仏往生するための法門、との意であろうか。

一、陽明文庫本は第七丁表第三行乃至同丁裏第十二行と直後の第八丁表第一行乃至同丁裏第十一行が同文であり、重複している。陽明文庫本の書写者は同書を一気呵成に書写したのでなく、第七丁の末行までを書写して筆を休め、やや後に書写を再開した時、自分がすでにどこまで書写したかを誤認して同じ文を重ねて書写してしまったに違いない。通常の衍文でないため、本稿では第八丁表第一行乃至同丁裏第十一行を「重写」と称した。なお、第七丁裏第十二行と第八丁裏第十一行は、重写直後の「かんなといふ人の」云々と文章がよく接合せず、ここに脱文があるのかも知れないがその理由は明らかでない。

この重複している第七丁表第三行乃至同丁裏第十二行と第八丁表第一行乃至同丁裏第十一行を対照すると、同文でありながら僅かに「この中に」(七ウ

と「このうちに」(八オ)、そして「うちかみと(字母「登」)(七ウ)と「うちかみと(字母「止」)(八ウ)などの表記の異なりがある。陽明文庫本の書写者は底本を概ねそのまま書写しつつも、表記は必ずしも厳密でなかったことが知られる。

一、緒言で述べた如く、本書の陽明文庫本は九割以上が平仮名で書かれた和文である。しかし、これが原態であったとは考え難く、複数回の伝写過程で多くの漢字が仮名に改められたのであろう。例えば、「けつ^決として」(六オ)という箇所は、決定としてから定字が脱落し決としてとなった後、決字を仮名に改めて斯くなったのであろう。当初からけつちやうとしてという仮名表記でありそこからちやう三字が脱落した、とは考え難い。

(1) 弁阿先師の源空についてではあるが、斎木一馬は「書状の草なり案なりを手許に留めていたであろうことは十分に考えられることといつてよからうと思う」、「一般に書状の草や案を手許に留めることは、少しも珍しいことではない」と述べている(『清涼寺所蔵の源空自筆書状について』「初出1973」、「古文書の研究」『斎木一馬著作集』三、吉川弘文館、1989、一七頁)。

なお、同じく撰号を「作者弁阿」とし、書状書き止め文言の「穴賢穴賢」が散見される『念仏三心要集』もまた、弁阿没後にその書状などを遺弟が複合させたものでなかろうか。夙に今岡達音も「本書は編集になる」と指摘していた(『念仏三心要集』、浄土宗典刊行会編『浄土宗全書解題』、浄土宗典刊行会、1934、四九三頁)。

付記

本稿は、科学研究費補助金(基盤研究C、課題番号「三K〇〇一一四」)による成果の一部である。また、刊行のため公益財団法人陽明文庫から「資料翻字掲載許可書」を取得している。